

下村観山筆「閻維」は、明治 31 年（1898）の第一回日本美術院絵画共進会（第五回日本絵画協会絵画共進会と連合で開催）に出品され、銀牌第二席を獲得した作品である。閻維とは茶毘、すなわち火葬のことで、釈迦の火葬を画題とする。茶毘の場面は通常、涅槃変相図の一場面として描かれることはあるが、単独の作品として描かれるのは類を見ない。画面中央には煙を上げて光を発する金棺が置かれ、左右には金棺を取り囲む会衆が描かれている。画面右奥には水墨で表された木、空中と地面には花が撒き散らされている様子が見える。本作は、明治 28 年（1895）に岡倉天心が推進した「懸賞仏画募集」と不可分の作品のひとつであること、当時称揚された上代美術が、直接的な引用は抑制されているものの、参照されていることが指摘されているが、作品の詳細な研究はなされていない。本発表では、観山が師と仰いだ岡倉天心周辺の仏教主題とのかかわりに着目し、明治期に「美術」や「宗教」といった概念が持ち込まれて、従来とは異なる新しい仏教美術が制作される中での、観山筆「閻維」の位置づけを探る。

本作の構図は、平安期の仏画を想起させることが指摘されてきたが、従来の涅槃図とは大きく異なった様子を見せる。大乘仏教の法身をあらわす巨大な釈迦は描かれず、金棺から広がる光をもってその存在が示唆される。会衆のなかにはインド人風の面貌の人物も描かれ、仏教のインド化が目に見えるかたちで表現されている。本作の当時の批評では、「将来は宗教の事でも歴史的に解釈して、印度を歴史上の国とし、釈迦を歴史上の人間として、歴史上の事実を現はす」絵画が新境地を開拓すると述べられており、本作が信仰画から歴史画への転換期に制作されたことがうかがえる。観山が、どのようなアプローチで従来の信仰対象としての仏画とは異なる仏教美術を制作したのか、当時の仏教の動向を踏まえながら考察する。

岡倉天心は観山の「閻維」について、『東洋の理想』（*The Ideals of the East*, 1903 年）にて、「民族神話と歴史年代記の古代精神の息吹き」が感じられる「大主題に新たな意味と情熱とを与え」た作品のひとつとみなし、高く評価している。これは、明治期に天平様式観が形成され、古典復興の意義が強調された流れにあった。本作の位置づけについて、「懸賞仏画募集」を中心とする天心の目指した仏教美術をめぐる言説や、東京美術学校卒業生による仏教主題絵画制作を踏まえて、再検討する。

以上の検討を通じて、本作が近代仏教の動向を反映しながら、人間としての釈迦を描くことで、従来の信仰画とは異なるかたちの、歴史画的意識を持ちあわせた新しい宗教美術の一例であること提示したい。